

台湾濁水溪扇端部の〈二林〉地域にみる植民地産業化の影響 その1 三五公司による小作制大農場の開発と農業移民

台湾濁水溪流域 糖業 三五公司
二林(彰化縣) 農業移民 小作制農場

正会員 青井 哲人* 正会員 寺内 達也** 正会員 陳 穎禎***
同 河野 紗輝** 同 保川 あづみ** 同 辻原 万規彦****
同 ○今 進太郎** 同 相川 敬介** 同 恩田 重直*****
同 杉本 まり絵** 同 武田 峻哉**

1 はじめに

筆者らの研究グループでは、台湾西部平原の濁水溪流域を対象に、清朝時代から植民地期までの都市史研究を進めている。本報告の対象である二林は、濁水溪下流域の「扇端部」に位置する。扇端部は排水が悪く、河川氾濫は扇中央部のように壊滅的な被害をもたらさずとも広域・長期の浸水をもたらした。そうした場所が、植民地産業化のもとでどのように変化するかを、三五公司による小作制農場経営(本稿)、在郷町(市場町)としての二林市街の植民地後半期の変容(次稿)を通して見る。

植民地下の基幹産業のひとつであった糖業には、甘蔗栽培の農業的側面と、製糖の工業的側面がある。製糖工場を核に形成された都市・溪州に関する既報は後者の側面にかかわる。本稿では、前者の甘蔗栽培の展開にともない農民の移住により創出された農村集落に注目する。現地での聞き取りと文献資料から、二林で行われた蔗作小作経営を概観し、客家人移住集落の一例として八間をとりあげてその社会・空間の実際を述べる。

2 三五公司について

二林で大規模な農場経営を展開したのは三五公司という会社である。まずは三五公司の設立背景を示す(*1)。

日本は台湾領有以降、島内治安維持と勢力拡大の面から対岸に関心をもち、とりわけ福建省廈門に注目した。1900年には、義和団事件に乗じて軍事占拠を試みるも失敗し、対岸経営事業は一時停滞していた。鐘(1997)によると、その状況を打破するきっかけとなったのが樟脳専売交渉であったようだ。この樟脳専売事業を展開するため1902年に廈門に設立されたのが三五公司である。当時、臨時台湾旧慣調査会第2部部長として貿易を含めた農商工分野の慣習を調査していた愛久澤直哉がその主導者であった。三五公司を設立した愛久澤は専売事業を推し進めたが、これが他国や清国の反感を買い、1910年に樟脳事業は中止となった。三五公司は対岸からの撤退を迫られ、愛久澤直哉の私企業となっていく。

3 源成農場設立による移民流入と開発

次に1909年に愛久澤直哉によって二林に設立された

三五公司源成農場について説明する(*2)。愛久澤は、開墾が許された官有地約457甲とその周辺の民有地1,569甲を強制買収し、農場経営を始めた。総督府は、官有地については未墾地開拓の出願者に対して日本人の積極的な導入を条件に開墾許可の方針をとっており、愛久澤は条件通り、日本人436人を募った。しかし、移住してきた日本人は、風土に適応できないことや未整備で風害が多い農場に失望したといった理由から、早くに離散しはじめた。2年後の1911年には日本移民人口は100人に減少し、その後も日本人の数は減った。

そこで愛久澤は、台湾人の導入を強化した。柯(2012)によると、1909年には393人だった移住客家人は、8年後の1917年には1,200人へと急増している。

源成農場の2,026甲の土地の範囲は、7つの大字にまたがっており、丈八斗、礪磘、後厝、犁頭厝、五庄子、面前厝、大湖厝を合わせて、「源成七界」と呼び、中心地の礪磘には、工場や日本人幹部の宿舎があった。

三五公司が二林に進出してきた背景には、台湾総督府が濁水溪の治水工事に伴って、荊仔埤圳の改良工事を行い、二林まで灌漑が可能になったことがあるとされる(平識1941)。三五公司は、排水が悪く、農業水利が未整備な地域に、源成排水という排水路の整備を行った。そこには多くの湿地が含まれていたようだ。

さらに、1932年から甘蔗運搬用の軽便鉄道が敷かれはじめ、北は明治製糖の溪湖工場に、南は塩水港製糖の溪州工場に繋がられた。



図1 二林の水路与1950年時の路線図
路線図は楊森豪「花蓮糖廠糖鐵路線初探(三)」地圖7をもとに作成

Impact of the Japanese Colonial Industrialization on Jilim(Erlin) situated in the Distal Swamp Area of the Lôchúikhoē(Zuosuishi) Fan, Part 1 Development of the Large Tenant System Farm by the Sango(Sanwu) Corporation and the Farmers Immigration

- *Akihito AOI
- **Saki KONO
- **Shintaro KON
- **Marie SUGIMOTO
- **Tatsuya TERAUCHI
- **Azumi YASUKAWA
- **Keisuke AIKAWA
- **Shunya TAKEDA
- ***CHEN Yin-Chen
- ****Makihiko TSUJIHARA
- *****Shigenao ONDA

4 客家人移民集落—八間

4-1 八間の土地と建物

点在する二林の客家人集落の中で、2017年8月の臨地調査において筆者らが対象とした集落が、二林鎮西斗里八間仔にある集落である。八間は「源成七界」の丈八斗に属し、東西に伸びる一本の道路に沿って分割された宅地が並ぶ集落である。ここでは、聞き取りから得られた情報をもとに、八間の成立経緯と現状を報告する。

現在、八間には東から順に、楊、薛、譚、張、葉、廖、葉と8家族が住む(図2)。しかし、八間という地名の由来はこの8姓ではない。西側の葉氏2家族は八間ができて、しばらくしてから入ってきた。また、八間は荊仔埤圳沿いに位置し、廖氏の家屋が建つ土地の西側が水利地となっている。植民地期および1982年の地籍図(図3)を確認すると、その水利地の東側にしか宅地はない。聞き取りでも楊氏から廖氏までがもともと八間で暮らしていたことがわかった。張氏と廖氏が、兄弟で入植してきたため、2間分の土地の上に住んでおり、楊、薛、譚、張、葉、廖の6家族で8間分と数えられていたのである。

次にそれぞれの出自だが、楊氏のみが福佬人で溪湖鎮北勢尾から移ってきており、他は客家人で、図2に示すように桃園・苗栗の客家の多い農村地帯から移住してきている。ある家族の入植時期は1930年代であるが、全貌は正確にはつかめない。

また、聞き取りによれば三五公司から竹造家屋が供給されていたことが分かった。楊氏や葉氏は親族が増えたため護龍を増築したというから、おそらく供給された家屋は一條龍(正庁の左右に寝室を2~4程度並べた横長の1棟)であったと推測される。兄弟で2間分の土地に暮らしていた張氏については、時期不詳だが2間分の土地の中央に三合院があり、戦後に兄弟の家系でそれぞれ土地を分割して取得したため、現在は兄側の土地に三合院が建て替えられている。廖氏は東側の水利地上を埋め立てて建物を広げ、現在では南北にも建物を増やしている。

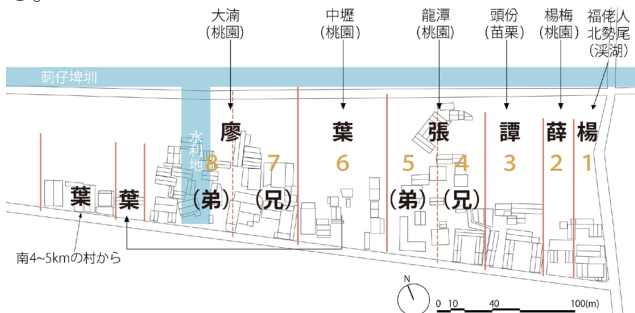


図2 八間の模式図

4-2 八間の農業

農業の変遷についても触れておく。日本植民地期には甘蔗と米の3年輪作を行っていたが、戦後に消滅していった。台湾では1955年から酒造用の葡萄栽培が始まったとされている^(*)が、二林では1965年に西斗里から広まっている。1987年まで酒造用葡萄の生産量と生産面積は彰化縣の中でも突出するほど葡萄栽培が栄えたようである。1996年から需要が減りはじめ、現在はドラゴンフルーツの栽培が主流となっている。

5 結

本稿では、植民地下の糖業開発とこれに伴う甘蔗栽培の展開、用水・排水の整備、移住客家の集落とその定着の一端についてみてきたが、集落の構成や建物配置について客家の特徴などの検討は行っていない。

他方で、溪州では植民地産業化により、既存の農村景観から市街地が形成されるまでに至っているが、市街化の要因は製糖工場や社宅の立地であった。二林においてこれに該当するのは礪礪であるが、その調査は不十分であるため、溪州との比較検討も含めて今後の課題としたい。

参考文献

1. 鶴見祐輔 2005『正伝・後藤新平 3台湾時代』(藤原書店)、鍾淑敏 1997「明治末期台湾総督府の対岸経営—三五公司の福建樟腦専売問題を中心に—」(台湾史研究 所収)、西英昭 2009『『臺灣私法』の成立過程—テキストの層位学的分析を中心に—』(九州大学出版会)
2. 浅田喬二 1966「旧植民地・台湾における日本人大地主階級存在形態」(農林水産政策研究所、農業総合研究所 所収)、台湾総督府殖産局 1929『台湾に於ける母国人農業植民』(台湾総督府殖産局)、平謙善雄 1941「臺灣二於ケル某製糖會社の農場經營二関スル調査」(中興大学図書館所蔵)、柯光任 2012「日治以來彰南地區客家移民與竹塘醒靈宮之研究」(逢甲大學歷史與文物研究所碩士論文)、張素玢 2004『歴史視野中的地方發展與變遷—濁水溪畔の二水北斗二林』(台湾研究叢書)、楊森豪「花蓮糖廠糖鐵路線初探(三)」(中華民國鐵道文化協會、『鐵道情報』第180期 2007年11-12月號、p81-82)
3. 張素玢 2004『歴史視野中的地方發展與變遷—濁水溪畔の二水北斗二林』(台湾研究叢書)

*本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」(代表：青井哲人、平成27年~31年度)の成果の一部である。

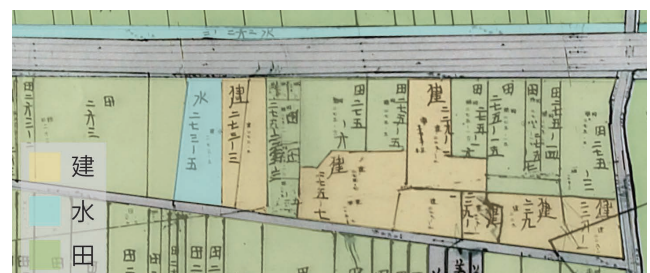


図3 地割と土地利用図(底図は1982年時点の地籍図)

* 明治大学理工学部建築学科 教授・博(工)

** 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程

*** 博(工)

**** 熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 教授・博(工)

***** 法政大学エコ地域デザイン研究所 研究員・博(工)

*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / **Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / ***Dr Eng. / ****Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / ***** Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.